第一回植樹祭

四日目、いよいよ植樹祭になる。朝早くにニエリのホテルを出発して、ナイロビ郊外にまで戻ってくる。初めの予定ではマータイさん出身地のニエリで植樹祭をする予定であったが、間近になってナイロビに変更された。ヌゴングという地区で森林保護区にされている、ナイロビ郊外では緑の比較的に多いところである。しかし、植樹祭の場所は背の低い樹が点在しているだけの荒地だった。おそらくは無制限に伐採された跡と思われる。

到着すると、すでに大きなテントが張られてあって、そのテントには日本とケニアによる第一回の植樹祭であることが看板に書き込まれていた。現地の言葉なので、我々にはわからなかったが、ダンカンに訳してもらう。
到着前にシャワーがあったようで、道も植樹地もびしょ濡れで田んぼの様になっている。まだ皆さんが集まっていないので、近所の農家に集めてあった樹木の苗を運ぶのを手伝う。どうやら、近くの散在している農家に今日使用する苗を集めておいたようだ。

国内でもセンターで植樹の指導をするときには植樹祭を催しているが、海外でも同じ様に必ず植樹祭をする。植樹をするにはまず苗作りをしなければならない。現地に生えていた樹木を植えるので、種拾いから苗作りまで現地の人にしてもらう必要がある。また植樹をしたあとも、自然に成長出来るまでの間、3 年間くらいは現地の人に面倒を見てもらわないといけない。それには現地の行政機関と共同事業という形をとり、共同作業をしたことを印象付ける必要があるし、そうしないと長続きしないことになるせっかく植樹してもほっておかれて枯れてしまうことも有るのだ。
この日行った植樹祭は翌日の日刊紙の一面に緑化の重要性と日本から植樹のボランテアが来て、共同作業を行ったことが報道され、我々とマータイ女史の意図がケニア全土に報道された。啓蒙するためには植樹祭としてＰＲすることが効果的だ。

苗運びをしている間に来賓が次々に到着し、植樹祭のセレモニーに入る。この地区行政の長の司会で森林局長の挨拶に続き、日本のケニア大使の宮村大使、丁度この時期にマータイ女史は日本訪問中なので参加できないので、その代理としてグリーンベルト運動事務局の人の挨拶がある。その後我々の代表として、センター長の宮脇さんが第一回の植樹祭にむけてその準備をしてくれた、地元の行政機関や関係者に感謝の言葉と植林事業の重要性を述べ、最後に横浜国立大学の藤原教授から、今日の植樹の植え方の基本と注意事項を説明してセレモニーは終了し、いよいよ植樹にとりかかる。

地元の人達と交流をしながらの作業だが、どうしても我々の方が日本やボルネオで慣れているので、ポット苗の外し方、地植えの方法や植えたあとのマルチングのやり方を手まねや、やって見せての教えながらの作業となる。
始めて間もないプロジェクトなので、まだ苗の準備が少ない。1,600 本くらいしか用意されていなかったので、すぐ終了すると思っていたが、途中から雨が降り出してきて、植える場所が泥沼状態になり、2 時間もかかってしまった。
我々も地元で参加した大人も子供も全身汗と雨でびしょ濡れになっての作業だが、それでも将来ここに森林が蘇ると思うと充実感がある。少なくとも今日参加してくれた地元の人々はじぶんが植えた樹を大事にするはずである。その輪が全土に広がりを見せてほしいものである。

日本大使館での研究会

ホテルに戻ってシャワーを浴びて汗と泥を落とす。シャワーを浴びながら、泥だらけになった服や靴を洗って部屋に干しておく。ホテルの部屋は乾燥しているので乾きは速い。明日の移動の準備をすませて、日本大使館にむかう。ホテルからそう遠くない所に大使館があった。
大使館はどこの国でも警護が厳重になっているので、入りやすいものではない。ここナイロビにある日本大使館はケニア国内の治安が悪いことから特別厳しい。中が見えないように厚い壁で覆われている。まるで、城壁みたいだ。入り口から入り、手荷物をX線に通して検査され、ボデイチェックされて、1人1人狭いドアから館内にようやく入れるようになっていた。空港の検査より厳重である。

大使館を訪問したのは、植樹祭に関して、地元行政機関と折衝の労をとってくれたことの表敬と、ここのホールを借りて我々の研究会を開き、藤原教授からケニアの森林事情の話を聞くためである。
横浜国立大学の藤原教授（女性）は同名誉教授で国際生態学センター長の宮脇先生のお弟子さんで植物生態学の学者である。日本政府の補助金でこの数年ケニアの植生調査をやっている。今回の植樹祭も現地に適した樹種の選定から、苗作りの指導を行い、根気強く大使館や地元の行政機関に働きかけた結果、なんとか今回、第一回の植樹祭の開催にこぎつけた功労者である。

藤原教授の講演を要約すると次の内容になる。
ケニアは熱帯乾燥林帯に属し、降雨量が少ない。長年の過放牧で森林の下草が食べつくされ、樹木が立ち枯れしたり、開発による伐採が続き、今では国土の2%しか森林が残っていないという。気候の変動とケニア各地を調査した植生の状況等、プロジェクターを使って記録した写真を見せながら、素人の我々にもわかるような解説をしてくれた。
牧畜というのは農業に比べて環境に与える影響は大きい。森林破壊と砂漠化はこの過放牧が引き金になる場合が多い。人口が増加し、食肉需要も増えていることから過放牧の状態になってしまうと牧草の再生が間に合わなくなり、下草も食べつくされてしまうとそれが森林破壊につながり、やがて砂漠化することになる。

ナイロビの街

ナイロビのホテルに泊まった翌朝、出発前にほんの僅かな時間があったので、ホテルの周囲を歩いてみる。今回のスケジュールではナイロビに一泊しか予定されていないので、市内を見学する予定はない。ガイドや旅行会社からは治安が悪いので、「絶対にホテルから外へ出ないで下さい。ケニアでは命の値段が安いのです」と脅されている。
しかし、せっかくケニアまで来て首都の街の雰囲気くらい知らないではもったいないと外に出かけた。地図を求めていないので、泊まったホテルがナイロビ市内のどこに有るのかはわからないが隣に大きな公園がある。一目では境界がどこにあるのかわからないほど恐ろしく広い。緑の芝生がどこまでも続いていて、樹もところどころに有るが、花壇はあまり見られない。平日のためか公園内を歩いている人も見かけない。見える所に大きな塔がある。おそらく、独立記念の碑なのだろうが、距離があり、公園内の人通りが少ないこともあって、危険を感じたので確かめてはいないが、そんな雰囲気を感じさせる建造物である。

公園とホテルの間にある大きな通りには車がひっきりなしに通っている。バス停には人が待っているし、歩道には並木が続いている。アカシア系の樹でところどころに赤い花がついているものもある。裏を廻って反対側に行くと、オフィスや商店街になっている。周りを見ても高層の建物はない。事務所もスペースは広くないが、近代的な内装をしている。ファーストフードや喫茶店もあって、欧米のビジネス街と雰囲気は変わらない。ただ歩いている人は肌の黒いアフリカ系の人達だけで、東洋系や欧米系の

人達は見かけない。おそらく治安が悪いので、外国人は車で移動しているものと思われる。

（写真 44 左）宿泊したホテル。外資系の大きい建物で設備も良い。周囲は緑と花の木が植生している。

（写真 45 上）ホテルから出た大通り。車が多く、渋滞している。この左が広い公園になっていた。

（写真 46 右）公園。英国式の芝生になっている。写真中央に記念碑らしきものが見えるがベンチも休憩所らしいところもない。

同じアフリカ系でも人種によって、肌の色合い、顔立ちや体形、それに衣装が違っている。オフィスに勤めている人はスーツやユニフォームを着ているので、日本のビジネスマンと変わらない。市場に出入りしている人達は色とりどりの衣装を着ているので、しばらく眺めていても飽きない。同じ黒人でも人種によって、容貌もスタイルも着る衣装も異なる。アフリカに居るとその違いが良く判る。

事務所街の一角に商店街の狭い入り口があり賑わっている。ケニアの生活空間を覗いてみたかったが、万一の場合には同行者に迷惑を掛けることになるので止めておいた。本来、その国の文化や民族性を知るには街中を歩いて、商店街や市場で売られているものを見たり、博物館で歴史や民俗文化を知るのが最も良いと思うのだが、今回の目的は違うところにあるので、次の機会にそれはゆずることにした。

（写真 48 左）車窓から見つけた建物。宗教寺院ではなさそうだ。旗が掲揚されているので、或は行政の建物かもしれないが印象に残る建造物である。

宮脇方式について

植樹祭も終えて、いよいよ楽しみにしていたキリマンジャロ山の麓にあるアンボセリ国立公園への移動することになっているが、途中ナイロビの街中を離れた所にあるケニア森林局に表敬訪問をして昨日の植樹祭の礼をすることにした。
そこで、今ちょうど近くでグリーンベルトのボランテアが日本から紹介された「宮脇方式」による植樹をしているとの情報を得たので、ついでに見学することにして車を回してもらう。

車で5分くらいの所に荒地が広がっていて、そこで10人くらいのボランテアが植樹作業をしていた。周囲には植樹した場所が広がっている。腰の高さくらいしかないので、植樹してからそれほどの年数を経ていない。説明によると、ここは以前スラム街で荒れ放題になっていた。そこを今森林再生の為に日本の宮脇方式で少しずつ植樹を進めているということだ。今日の作業は植樹の準備の草刈をしていた。乾燥した赤い土壌で養分はなさそうだ。それでもちゃんと前に植えた苗は活着していた。

（写真 49,50）植樹の前準備に蛮刀で草を刈り、鍬で穴を開ける現地のボランテア。

（写真 51 上）農作業をしている人の服装もいろいろ。
色彩豊かな衣装を着ている人も多い。

（写真 52 右上、53 右下）作業を見学したり、話を聞いたりしていると、好奇心の強い子供達や通りがけの人々が集まってくる。

ここで宮脇方式なるものを紹介しておきたい。これはセンター長の宮脇博士が長年の植生調査から得た森林再生の生態学的な方法で、我々がボルネオの実験林で実践し、証明しようとしている方法である。
もともと自然に放置された土地にはまず一年草が生え、多年草の草原になり、灌木が成長し、中木、高木の森林に成長していくのだが、それには100年単位の長い年月を必要とする。それを半分の年月で実現させ、しかもあまりあとあとの維持に手をかけることなく自然の形の森になるのが望ましい。

それにはまず元々そこにあった土地本来の植種にすることが大事である。植生調査で植種を決めたら、ポット苗を作って根をよく成長させてから混植密植する。充分なマルチングをして、保水と雑草の繁茂を防いでおけば、その後2,3年くらいの維持作業で、あとは自然の力で森林再生が出来るというものだ。ポイントになるのは混植密植である。
植林というと、同種の樹木を一定間隔で植えるのを思い浮かべるだろうが、宮脇方式はそうしない。間隔も狭いし、隣に同じ樹種は植えない。自然の森に近い状態にしていくことを試みている。同じ樹種しかない森は自然界では不自然な状態なのだ。日本の戦後の植林で作られた杉林や松林は自然界では不均衡な状態で、間伐等の手入れをしないと枯れてしまう。
事実この方法で日本の各地で、ボルネオやブラジルで森林再生が実現している。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

＜ナイロビ市内写真集＞（写真54〜57）

ロータリー。看板広告が多い。

市内の共同住宅。

観光客用のレストラン。鰐や駝鳥等の野生動物の料理がある。あくまでも観光客用で現地の人はいない。

ナイロビ唯一の日本料理レストランのウエイター。